

総合学科高校における選択と進路

ー非大都市・公立校の事例ー

安藤 健二 (大分県立日田三隈高等学校)

anken@js2. so-net. ne. jp

1. 研究の視点と方法

本研究は、以下の問題意識のもとに構成された。
①総合学科高校における生徒の進路に関する意識はどのようなものであるか、②それらの意識と、総合学科固有の活動は、どのように関わっているか、である。

これらの問題意識に基づき、発表者(安藤)は、ある総合学科高校の3年生を対象に、質問紙調査を行い、その分析を行った。

2. 調査の概要

(1) 対象校について

対象校(A校)の概要を以下の表に示す。(表1)

表1 A校の概要

所在地・設置者	九州・公立
学科(定員)	総合学科(200)
前身学科(定員)	普通(80)・商業(80)・家政(40)
総合学科設置年	1996年
在籍者数	194名(男子48・女子146)
進路希望	就職60(32.1%) 専門学校82(43.9%) 看護系学校10(5.3%) 短大12(6.4%) 四年制大学16(8.6%) 未定7(3.75%)
系列	①自然科学 ②生涯スポーツ ③アパレルデザイン ④国際流通 ⑤人文科学 ⑥食品サービス ⑦情報企画

※定員は1学年当たり。在籍者数および進路希望は調査対象学年(3年)

(2) 調査の方法

2003年7月に3年生を対象として、進路意識や総合学科固有の活動に関する質問紙調査を行った(サンプル数187名、在籍数(194名)の96.4%)。質問項目の多くは、4点または5点尺度で問われ、これを間隔尺度と見なして統計的处理を行った。

3. 基礎的な分析

(1) 入学動機

総合学科高校へ入学する生徒はどのような動機をもって、その学校を選んだのであろうか。入学動機に質問した19項目について、因子分析を行い(詳細データは当日配布資料参照。以下同じ)、その結果、6つの因子が抽出された。このうち第1因子(固有値4.980)に高い負荷量を示す質問項目を示す(表2)。

これらの質問項目は、総合学科固有の制度や活動に関するものと、それ以外のものがある。このうち、後者についてみると、これらはいずれも本来、総合学科にのみ見られるものではない。しかし多くの総合学科高校が、自校の特色をアピール

する際に使用している文言である。

表2 入学動機に関する第1因子

項 目	因子負荷量
本校にしかない科目に魅力を感じた	0.825
希望する進路が達成できる	0.769
自分で好きな科目を選べる	0.735
勉強したい科目があった	0.648
やりたいことがはっきりする	0.606
本校にしかない活動や行事に魅力を感じた	0.411

※主因子法・バリマックス回転後。詳細は当日配布資料参照。

ここから解釈しうることは、A校の入学者は、総合学科に関わる固有の制度や活動と、その特色としてアピールされる事柄は、一体のものとして捉えている、ということである。なお、以上の考察から、この因子を「総合学科への期待」と命名した。

(2) 将来の希望職業

総合学科において、職業意識の形成は、どのようになされているのであろうか。解明の手がかりとして、将来希望する職業(上級学校進学者は、その卒業後の職業)について、どの程度明瞭になっているかを、入学以前と調査時(3学年)について質問した項目を分析する(ただし入学以前に関しては、調査時の回想)。

以下に各時点での度数と比率を示す。(表3)

表3 希望職業

	入学前		3年7月	
	度数	%	度数	%
はっきりと1つに決まっている	18	9.6	70	37.4
ほぼ1つに決まっている	46	24.6	54	28.9
どれにするか迷っている	65	34.8	42	22.5
はっきりとしない	41	21.9	20	10.7
特に考えていない	16	8.6	0	0.0
無回答	1	0.5	1	0.5
合計	187	100.0	187	100.0

4. 希望職業の明瞭さと進路意識

(1) 高校卒業後の進路希望との関係

前項に見た希望職業の明瞭さと進路意識には、どのような関係が見られるのであろうか。

上記の設定について、「はっきりと1つに決まっている」「ほぼ1つに決まっている」と答えたものを「明瞭」、それ以外を「不明」として、入学前から調査時までの希望職業の変化を、①明瞭→明瞭 ②不明→明瞭 ③明瞭→不明 ④不明→不明 に分類した。最も多い変化は「不明→明瞭」(70名・全体の37.8%)であるが、その一方で、当初は明瞭であったものが不明に(「明瞭→不明」11名・

全体の 5.9%)、また不明のままに推移している生徒(「不明→不明」51名・全体の 27.6%)が少なからずいる。

これを高校卒業後の進路希望別に集計したものが次の表である。(表 4)

表 4 「進路希望」と「希望職業の変化」クロス集計

	希望職業の変化				合計
	明→明	不→明	明→不	不→不	
就職 (度数) (%)	9	19	5	25	58
	15.5	32.8	8.6	43.1	100.0
専門学校	26	34	5	17	82
	31.7	41.5	6.1	20.7	100.0
看護系学校	5	5	0	0	10
	50.0	50.0	0.0	0.0	100.0
短大	7	5	0	0	12
	58.3	41.7	0.0	0.0	100.0
四年制大学	4	6	1	5	16
	25.0	37.5	6.3	31.3	100.0
決まっていない	2	1	0	4	7
	28.6	14.3	0.0	57.1	100.0
合計	53	70	11	51	185
	28.6	37.8	5.9	27.6	100.0

※欠損値は集計表から除外した。

度数の少ない「決まっていない」を別にすれば、就職希望者群において「不明→不明」の割合が最も高い(就職希望者内の 43.1%)。また、四年制大学希望者を除く進学希望者の多くが、希望職業が明瞭になっている。これはどう解釈されうるのだろうか。

考えられることの一つは、専門学校・看護系学校など、専門性の高い進学先を希望する生徒には、卒業後の職業について、明瞭に意識できているということである。

もう一つ可能な解釈として、職業選択の時間的な距離の違い、あるいは「切実さ」の違いが考えられる。すなわち、職業選択が間近に迫っている就職希望者は、現実問題として、希望職業に就職可能かどうかを考えて「迷い」、場合によってはその困難さから、再考を迫られ、そのために現時点では「はっきりしない」ということになる。一方、当面の職業選択を迫られない進学希望者は、現時点で考える希望職業を変更する必要がない、と考えられる。

(2) 進路意識との関係

総合学科高校の生徒はどのような進路意識(職業観や将来の生活設計など)を有しているかを探るため、進路意識に関する因子分析を行った。その結果、6つの因子が抽出された。

これらの因子と「希望職業の変化」との関連を調べ、職業希望が明瞭あるいは不明瞭な者の持つ進路意識の特徴を調べた。

方法は、前項の各カテゴリー別に、それぞれの因子得点の平均を算出し、その平均の差を一元配置分散分析によって吟味した。

その結果として、6因子のうち、「楽な生活」(有

意水準: $p < .05$)、「職業人としてのこだわり」($p < .01$)に比較的大きな差が確認された。このうち前者の表を示す。(表 5)

表 5 「楽な生活」

	因子得点の平均
明瞭→明瞭	-0.2132
不明→明瞭	-0.0745
明瞭→不明	0.0597
不明→不明	0.3100

これをみると、「明瞭→明瞭」と「不明→不明」との間に、対照的な傾向が見られる。「楽な生活」因子には、「なるべく楽な仕事をしたい」「苦労の少ない人生を送りたい」などが含まれる。進路不明のままにあるものは、「楽な生活」に肯定的なものが多いいえる。

(3) 総合学科固有の活動との関係

次に、総合学科固有のものを分析の変数に用い、総合学科としての効果や影響を調べる。方法は、前項と同じく、「希望職業の変化」でのカテゴリーごとに、諸変数の平均の差を吟味するものである。

まず、総合学科自体に、どれだけの期待をしていたかを比べる。変数としては、先に挙げた入学動機の因子分析での抽出された因子「総合学科への期待」の因子得点を使う。(表 6)

表 6 「総合学科への期待」

	因子得点の平均
明瞭→明瞭	0.042
不明→明瞭	0.110
明瞭→不明	0.256
不明→不明	-0.293

この中では、不明のまま推移した群(「不明→不明」)における総合学科への期待が、相対的に低いと見ることができる。なお、この比較では、ある程度の有意差($p < .10$)が確認された。

次に、1年次履修科目の「産業社会と人間」に関する比較を行った。この科目のねらいとして、望ましいキャリア意識の形成や進路選択能力の育成があり、この科目への取り組み方の違いが、職業意識の形成に何らかの影響を及ぼすことが予想される。そこで、この科目の諸活動に関する項目群から主成分を抽出し、その成分得点を、この科目への積極性を示す変数として用いた。

分析結果としては、統計的に有意といえる差は確認されなかった。ただし、参考として値は示す。

(表 7)

表 7 「産業社会と人間」への積極さ

	成分得点の平均
明瞭→明瞭	0.172
不明→明瞭	-0.075
明瞭→不明	0.317
不明→不明	-0.220